

清水美紀(著)

『子育てをめぐる公私再編のポリティクス—幼稚園における預かり保育に着目して—』

2019年 勁草書房 A5判 288頁 定価(本体3,800円+税)

杉山 沙旺美^{*}

本書は、2018年にお茶の水女子大学に提出された博士論文に、修正を加えて書き上げられたものである。子育ては「誰が」「どのように」担うべきと語られるのか。子育てをめぐる「責任」と「遂行」はどのように議論されているのか。その動向について幼稚園での預かり保育に着目しながら考察し、子育ての公と私の関係の変化を「再編のポリティクス」として論じた著作である。近年、『子ども・子育て支援新制度』の施行など、子育て支援や保育は大きく変化している。その中で、政策言説というマクロレベルと保育者・親というミクロレベルから分析を行った本書は、今後の子育て支援の方向性を考える上でも重要な示唆を与えてくれるものと思われる。

本書では、対象や手法が異なる複数の調査を実施しており、大きく三つの研究をまとめている。本文は、序章、第1章から第8章、終章で構成され、まず序章では、本書における概念定義とともに、預かり保育という対象の妥当性について記述している。預かり保育は、教育政策の側面だけではなく、労働政策や家族政策の側面も持つ実践であるとともに、その意味づけには子育てに対する考え方、問題意識が映し出されており、「ポリティカルな特性をもっている」と説明している。第1章・第2章では、子育てへの社会的支援と預かり保育に関する先行研究を整理し、本書の課題を確認するとともに理論的枠組みについて検討している。これまでの研究においては、「子育ての社会化」のなかにあるケア行為の社会化、すなわち子育ての具体的な実践、「遂行」の部分には言及されているものの、子育てをめぐる意思決定やコスト負担といった「責任」に関わる部分もまた、社会化されているのか、あるいは社会化が望まれているのかといった点が十分に考察されてきたとは言い難いことを指摘している。そこで著者は、預かり保育に焦点を当て、子育ては今どのような「責任」と「遂行」の関係の中に議論されているのか、そして、子育てをめぐる公的領域と私的領域の境界がどのように位置づけられようとしているのかを検討課題として設定した。また、その理論的枠組みとしてN.フレイザー(1989)の「ニーズ解釈の政治」議論を取り上げている。第3章では三つの研究の概要を示し、政策言説の分析、保育者を対象とした質問紙調査と半構造化インタビュー、親を対象とした質問紙調査と半構造化インタビューという「多様な手法、対象を用いた実証的な分析」について説明している。

第4章から第8章では、各研究の結果と考察を示している。第4章では、1990年代以降の預かり保育に関する政策言説の変容について分析している。当初、預かり保育の実施を支える論理は「女性の社会進出への対応」であったが、2000年ごろから「子どもを生み育てることへの負担感や不安」など、少子化の要因に対応するという位置づけが登場し、さらにその後「家庭の教育力の補完」としての位置づけに転換していったことを示している。預かり保育は公共的に対応すべきものであると政策課題として扱われつつ、その背後では家庭のなかに「教育力」を求め、子育てをめぐる家庭の責任を強調する論理も登場していたことを指摘し、預かり保育をめぐる政策言説が策定しようとしていた公的領域と私的領域の関係は、揺らぎつつ変化してきたことを明らかにしている。

第5章・第6章では、保育者が預かり保育をどのように実施し、位置づけているのかについて論じている。保育者は預かり保育に対して「両価的な」認識を持っており、一方では「預かり保育は親への支援として必要である」との認識を高く支持し、同時に他方では「本来、定時でのお迎えが理想である」との認識にも理解を示していた。この認識の背景には、預かり保育を実施する保育者の葛藤があると指摘してい

^{*} お茶の水女子大学大学院博士後期課程

る。保育者は、預かり保育を「幼稚園の時間」と「家庭の時間」の狭間として意味づけ、「家庭」のような場として環境を整え、異年齢児の交流が生じうる場であると特徴づけており、利用するか否かの「線引き」は親に一任していた。その一方で、保育者は親の必要感だけでなく子どもの必要状態も含めて両方に対応しようとする中で、親と子どもの認識が一致していないと判断した場合に、預かり保育を実施することに対して迷いを感じていることも明らかにしている。

第7章・第8章では、親への調査を踏まえて預かり保育の利用状況やその背景にある意味づけについて論じている。結果の中で、預かり保育の利用、とくに利用頻度には、基本属性や家庭状況だけではなく、親自身の子育てや家庭生活に対する意識が関わっていることが明らかにされている。性別役割分業意識に違和感を持つ人たちに、預かり保育は積極的に利用され、対して子育てに対する責任は母親もしくは家庭にあるという意識を強調する親はあまり利用していなかったと指摘している。その中で、子育てに専心しなければならないという意識を持ちつつも、預かり保育を利用しているという現状との間に矛盾を感じ、それを葛藤として語った親もいたことから、ケア行為を外部に委ねることを選択していることと、外部に委ねることを肯定的に意味づけることは必ずしも一致していないと分析している。

終章では、第4章から第8章で論じてきた三つの研究の結果を、子育てをめぐる「責任」と「遂行」に関してどのようなロジックが登場していたかという視点から整理し、本書の結論として子育てをめぐる再編のポリティクスという研究課題について分析している。そこで本書は、子育てをめぐるロジックを、子育てをめぐる「責任」を公的領域あるいは私的領域に位置づけるのかという軸と、子育ての具体的なケア行為の「遂行」を公的領域あるいは私的領域に位置づけるのかという軸に沿って四類型に区分し位置づけとその動向を整理している。この四象限の図について、著者自身も図式化することの限界性に触れているが、政策言説、保育者、親という三つの視点における預かり保育の位置づけを整理し概観するにあたっては分かりやすい図となっている。そして図を用いた整理を通して、マクロレベル（政策言説）とミクロレベル（保育者・親）ではロジックの布置関係に異なる特徴があることを示している。つまりマクロレベルでは、子育ての「責任」を私的領域に位置づけるか、公的領域に位置づけるかという対立軸をめぐる争われ、ミクロレベルでは、子育ての「遂行」を私的領域に位置づけるか、公的領域に位置づけるかという対立軸をめぐる展開されていたと指摘している。本書は、子育ての「責任」と「遂行」をめぐるマクロレベルとミクロレベルでは異なる位相での再編のポリティクスが展開されていたと結論づけている。

評者は、教育課程に係る教育時間とは異なる時間帯として捉えた「預かり保育」自体への関心から本書を手にとった。実際本書の中では、保育者が預かり保育を「幼稚園の時間」と「家庭の時間」の狭間として意味づけ、教育課程に係る教育時間とは異なる位置づけを見出し実践していたことが示されており、非常に興味深く拝読した。しかしそれだけではなく、本書は、預かり保育に着目した研究を通して、子育てをめぐる「責任」と「遂行」を公と私の関係から捉えるという視点を与えてくれている。そして、そこにはマクロレベルとミクロレベルで次元の違いがあったということ、また「ポリティクスは変容する」ということは、今後の子育て支援について考えていくうえで、ある一面から考えられた一時的な支援やその支援の表面だけではなく、多角的に継続的に検討する必要があるという重要な示唆を与えてくれている。子育てや子育て支援を語る上でそのアクターは、政策言説、保育者、親に留まらない。その中で、今行われている子育て支援は、誰がどう位置付け、誰にとって何を支援しているのか、支援されているのかということ、改めて問うことが必要なのである。また、預かり保育に関わる再編のポリティクスは、公費負担という新たな論点をもって今後さらに変化していくと考えられている。これからも子育て支援や幼児教育・保育は変わっていくからこそ、その時子育ては「誰が」「どのように」担うべきと語られるのか、その動向を捉えていく視点を持っておきたいと考えさせられる書である。